針葉樹會報

通卷第五十四號

山想片言

柿原謙一

○古代の民は、山・氷・岩に對して美麗しさを認めなかつた—それを了解したのは近代のひとの魂である（Henry Hoek: Die Schönheit der Berge を讀んで）。

○常に現實に對する倦くなき執着を感じてゐたルネッサンスの人が、初めて山の美を見出したと言ふ。「生くることは幸である」と感じたあの人々が。

○舞臺の英雄が現實の英雄を氣取る處に悲劇が生れる、と誰かゞ言つた。ユアングマン アーホイ！ 焚火の陽氣な笑顔がそう呼び掛ける樣に思はれてならない一夜。

○「冬來りなば春亦遠からじ」と。あゝ何と言ふ豐かにも惠まれた生々しさを、この言葉は與えて呉れる樣になつたことか。

○誰も居ない雪に埋れた信州の或る峠の上に立つた時、靜かに徑の側にある堂祠をおがむ氣になつた。樣々の想ひと人生の重荷を脊負ひ乍ら、こゝを通つて行つた昔の旅人が、やはりそうであつた樣に。

○清水トンネルを越すと懷しい越後の雪國が在る。モンペを着けた人、特異な家の建方、そして一面に擴がる雪に埋れた田や村。三國峠へ續くあの徑が、しんみりと山腹を通つてゐる。

○アクシデントを起した時、眞先に頭に浮んだのは母の顏だつたと語られたことがある。二人の親しい山友達が時處を異にして同樣な體驗を經た後に語つた、いみじくも相似た言葉であつた。

○峠の上に立つた時、誰も自己の限界を考えさせられることがない。ルーヒッヒな氣持で無限に擴がり行く無限の世界を見透してゐる樣な、平明な靜けさに憩つてゐるんぢやないだらうか。

○青木鑛泉に降りて行つた時だつたか、傷つける者、心痛める者を前にして、謙虛な柔しさの中に慰めることを忘れなかつた、あの老人の姿が目に浮ぶ。

○山峽の宿に一夜を明した時、夜明け前の黎明の寒さに響かせて鈴の音を立て乍ら通つて行つた小荷駄馬の嘶きを、夢の中に覺えてゐる。恰もそれは一世紀も離れた往昔の裡へ裡へと引入れられる樣な心持だつたことも。

○國民的存在の自覺が果した大きな役割。と共に私は靜かに登山者的存在の自覺を意識したいと思つた。

○二月下旬の東京の空は深く濃く澄んでゐる。春が來るぞ、春が來るぞと言ひたそうに吹く風を孕み乍ら。

○「内も、外も嵐だ！」 そんな時でも小舍の中に居る山男は少し

も撓まざる精進に生きやうとする。（一九三六・二・一五）

那須岳平定記

第一日　ク　マ

常日頃の心懸けの大切な事を今度位痛切に感じた事はなかつた。前日まで吹雪いてゐた天候がコンちやんと小生の御登山に際して忽ち一點の雲なき快晴となり、翌日御下山となるや、正午、峠の頂上を後にするや否や一天俄かにかき曇り、お山は黑い怪雲の中に其の姿を沒して了つた。案内者の話では四年に二度目の天氣だつたとの事、雨降男の令名高き御人連に狸や熊の爪の垢は大變藥になると昔からの言傳へあり、心得置いて然るべし。

コンちやんに誘はれて仕方なしに三井山岳會のワイ〳〵連のお伴をして十五日の上野發夜行に便乘、割引の利かぬ爲めか宣傳の足りぬ爲めかスキーのお客の少なかつたのは勿怪の幸、十六日四時一分黑磯着、バスに乘つて廣い高原道を那須湯本温泉へ。

温泉スキー連を松川屋に殘しB班の人三人と五人、まだ眞暗な登山路を大丸へと急ぐ。月の雪の明りでラテルネは不要、殺生石の上の臺地からスキーを着ける。四年許り前に一度、上の精錬所事務所までスキーで行つた事があるので所々に見覺えはあるが辨天を大丸と間違へて下つたのは大失敗だつた。餘り天氣がいゝので半分豫定にしてゐた大峠廻りをやる事にして人夫を一人雇ふ事にする。小鷹といふ十九才の子供、嫌にスキーが旨いと思つたら去年と今年の栃木縣十八キロの優勝者で全日本のレースに出場したパリ〳〵の選手だつたとはさもあらん。如何なる急斜面と雖もヒヨイ〳〵と輕く廻つてリスかイタチのよくやるやうに後を向いてはこの人の來るのを待つてゐるといつた具合、うめえ野郎も居るもんだと實は感心した次第。

精錬所を過ぎて暫く行つてから右手に朝日岳の南斜面が可なり急に落ちてゐるのが見えるが吾々は此の中央にある朝日の澤といふのを登る事にした。見懸けは馬鹿に急に見えるが大した事はない、三井組の三人とは此處で別れて吾々二人は一まづ奥の澤（昆沙門澤）に下る。いゝ雪だ。

朝日の澤の入口から二十九回のキックターンをやつて一時間許りで朝日岳の肩に出る。此の澤は割に急だが雪崩は殆ど出た事がないといふ。簾山（三本槍前岳）から清水平、熊見曾根に續く邊り一面に眞白な雪の世界だが風の強い爲めか何處を見てもガリ〳〵らしい。朝日の頂上は直ぐ頭の上にあるが相當な惡場があるので一まづ右側を捲いて熊見曾根との鞍部に出る。アイゼンのお影で難なくトラヴアース、小鷹を待せて二人だけで朝日の頂に登る。男體、太郎、白根、遠くは會津駒が常盤御前の笠の樣な格向をして前山の後にドッシリと控えてゐる。近くの三倉大倉も標高の割に立派に見える。

朝日を辭して鞍部からスキーを擔ぎ熊見曾根に向つたがないと潜る、つければガリ〳〵で實に弱つた。然し頂上から清水平までは東斜面の一部に雪質のいゝ所があつてボーゲンをやる事が出來

た。此の清水平は無雪期には一面の這松地帶で幹が太く枝が五間も六間も横に延びてゐるので東京などへ持つて來ると大した値段になるらしい。之からスダレ山の西斜面のガリ〳〵を過ぎ三本槍の下に出る。鞍部から二三十米突下の所で丁度晝飯となつたが此處が實に雪質のいゝ遊び場所である。シューと直滑降をやる、ズーンと向ふ側に乘り上げる。寫眞なんかとるにも持つて來いだ。

三本槍の登りは大した所ではないのだが實にへばつた。夜行の疲れが出た爲めだらう、二三歩行くともう息が切れる、こんな事も珍らしい。然しその肩から十年前に見た猪苗代湖や磐代山、或は嘗遊の吾妻山群、遠く屏風の樣な崇嚴な飯豊を眺めては疲れも何も忘れて了ふ位であつた。實際いゝな、俺達の今頃の山登りは山旅の程度を少しも出てゐない、アルピニズムを獲得するんでもない、それでゐて俺達は充分山を觀じ且感じてゐるんだ、分類なんてどうでもいゝぢやないか、理屈を考へてる内はほんとの山登りは出來ないんだ、浩然の氣を養ひ、身體を一と月保たせる爲めに偉い苦勞をやりに行くんだ、俺は之で充分滿足してゐる。淺薄な詰られえ野郎だと思ふなら思つて呉れ。さう思はれたつて俺は蜜蜂が旨さうな蜜のある花から花へ飛び廻る樣に一年中何處へかへ歩き廻つて行く事だらう。

てな事は今書き乍ら考へた事で三本槍を歩いてる時には早くガリ〳〵から解放されたいと思つてゐた許りだつた。

ケシの朝日岳へ續く山稜との分岐點から直滑降で五十米突許り下りステーンとひつくり返つて暫く休憩。北斜面の樹木が素晴らしい。鏡沼には世にも珍らしい蛙がゐるとの事だ、孫さんだつて知られえ筈なんだから大したものだらう。その蛙のそばへ何でも持つて行くとアレヨ〳〵と思ふ間にその色に變つて了ふんだ相だ。只赤だけには染まらないといふから何處かのお役人など神棚へまつつてやれば靈驗あらたかなるものがあらう。此の邊から漸く雪はよくなつた。その代り南斜面で可なり急だ。壁の樣な所もある。スキーだからこそひつかゝつて行くが歩いちや通れ相もない、落ちれば怪我はせぬまでも二百米突は覺悟せねばならない。

「孫さん通らず」といふ難所だ相だが眞疑の程は責任を持たぬ。

雪が大部ゆるんで來たのでパラでパラフィンをぬる。大峠へ着いたのは三時頃だつた。靜かだ、耳をぢつとすましても何一つ聞えぬ。ケシの朝日岳がピラミッド型に白い峰頂を立てゝ會津の下界を遮ぎつてゐる。小梟の聲もない、風もないから動くものもない。那須の裏山、會津へ越へる大峠、ほんとに世の中からかく絶した峠といふ事が出來る。

之から峠澤、弓尾根、中の澤、赤岩澤を横切つてコンビラ尾根に登り三斗小屋温泉に下つたのは四時四十分頃であつた。此の道は地圖には出てゐないが近道らしく案内がゐた爲め間違ひもなく無事温泉に着く事が出來た。後はコンちやんに讓る。(一一、二、二一)

第二日　狸

何時の山行の時でも我々仲間の組合せと天候とは重大なる關係

がある事が論議されるのであるが最近に至つては遂に永年の歸納法的結論として大體其の組合せを變更させる事に依つて自由自在の山行の天氣を支配する事が出來る樣になつた。是れは私が最近手相を見て其の人物の過去をぴたり〳〵と當てるのと同じく經驗を基としたやり方である。

であるから東京で天氣が續いて、たまには雨にでも濡れて見たいと云ふ時には誰々氏を誘ふ、又山行の種類で如何しても雨にやられては困る時には誰々氏と!!殆んど機械的に決めて殆んど此の法則が外れる事が無いのは我ながら吃驚する位である。

然らば雨男は誰ぞや　天氣男は誰ぞや　と云ふ事になつてくるが其の前に吾人の經驗は更に其の雨男天氣男にも强弱の違ひがある事を敎へる。

三人の天氣男が居ても一人の雨男が參加した爲め他愛もなく全身ずぶ濡れになり山へは登つたが結局どんな形をして居たかさんと分らぬと云つた狀態に引ずり込む物凄いのも居るし、又二人の雨男と一人の天氣男の組合せは天候は曇保合ひと云ふ均衡の狀態に我ん張る天氣男も居る。

私は斯くの如く永々しき前置をしたに就いては理がある。それは今度の熊さんとの組合せである。此の組合せは遂に四年間にたつた二日しかないと云ふ上天氣を招來した。

其の前晩の東京のラヂオは「栃木縣地方は天氣は惡くなるから山へ行く方はお止めになつた方が宜ろしい」と云ふ東京中央放送局の御託宣である。

恐る可きは人の和である事よ。

私の手元には今や針葉樹會員の順列組合せは天候に如何なる程度に於て作用するかと云ふ頗る調法な公式が出來つゝある事をお知らせするの光榮を有する。

扨て第二日目であるが昨晩の夕食の事に就き是非諸賢のお耳に入れればならない事がある。熊さんは人も知る肉類の愛好者である。肉であれば大抵の場合實に喜こんで御食事をさられるのが普通である。昨夕コンピラ尾根に登つて下の三斗小屋温泉を見た時、實を云ふと二人とも腹が減つて物も言へぬ位であつた。さもあらん。朝七時半頃大丸温泉で食べたきり九時間と云ふものはろくに何も食べて居ない。

而も晩の食膳に上つたものは何か。芳香鼻を突く肉と野菜の煮込みである。わつと上る歡聲に今や世にも稀なる美味快味の陶醉境。ふと氣がついて側なる媼に「如何なる種類の肉ぞ、斯くもうまき」と尋ねしに「そは此邊に住む熊の肉にてぞありける」と答へければ熊さんの顏忽ち世にも悲痛の相を呈し、遂に二度目の茶椀は膳に伏して更に食事を進むる氣配なし。私も氣毒に思ひて遂に三杯目にて食事を中止せり。去ぬる日銀座裏をペン公と歩ける時、ふと料理屋の表看板に「加賀の白山山麓に住んで居た日も新らしき狸の汁あり」と書いてあつた、是れ丈けでもそぞろに哀れを催した私ですので現在目の前で自分の仲間を食べてしまつた熊さんの心中を察し實に何んとも云えない同情が湧いて涙を止めるのに苦勞したと云ふ理である。

はつと目が醒める。昨夜寢た時と今醒めた時との間には時間的經過が少もない樣に思えるのに早や十時間經つて居る。ゆる〳〵仕度をして外へ出たのは九時半。今日も亦良いお天氣である。三斗小屋盆地を隔てゝ三倉、大倉の山壁が威壓的に目前に迫つて居る。

ふつと吹けば飛び散るよい粉雪の中をスイ〳〵とスキーは獨りで進む、こんな時には自然に鼻歌が出てくる。

全く呑氣なスキー行である。大きな兎が一匹、木の下で遊んで居る。一寸食慾をそゝる。昨夜の肉に對する未練が、まだ殘つて居るらしい。

その内に御澤の上迄來ると那須岳、劍ケ峰、朝日岳と順々に見へて來る。可成立派な眺めである。振返つて見ると昨日も散々眺め盡した箇の會津駒や其の附近の山々が又新しい感激を以つて胸にこたえて來る。「幸なるかな此の山行」と云つた氣持がする。

峰の茶屋に着いてもまだ晝前である。而し到々天候も崩れて來て一寸休んで居る間に那須岳も朝日岳も皆んな見えなくなつたが豫定通り那須の頂上に登つた。もう風も相當强く視界は目前數間位である。

ありつたけの御馳走を茶屋の側の岩陰に出して食べ又例の鼻歌交りに大丸迄一氣に滑つて來てしまつた。

今度大丸から連れて行つた小鷹少年は今年の栃木地方神宮豫選十八キロレースの優勝者丈あつてスキーの上手な事はお話にならない。我々二人を殘してすぐ姿を消してしまうが「スキー」は速力があるから餘り待たす事もなく一緒に下つたが口數の少ないよい少年であつた。

以上

ナンガ・パルバット遠征日誌（一九三四年）

R・A・K　サングスター

五月一日　全遠征隊員がいよ〳〵出發する爲にスリナガアル(Srinagar)に參集。

二日　メルクル(Merkl)、フリエール(Frier)及び四百人の苦力(クーリー)よりなる第一隊はトラグバアル(Tragbal)に向けて出發。

三日　ヴイーランド(Wieland)、シュナイダー(Schneider)、サングスター(Sangster)及び二百人の苦力よりなる第二隊も同じく跡を追つて出發。

十日　第一、第二兩隊は深雪の中をトラグバアル及びブルジイル(Burzil)の兩峠を越へてアストール(Astor)に到着。

十四日　ラキオット(Rakiot)橋にて一夜をおくる。

十八日　ラキオット谷(Nullah)に困難なる登攀をなし、一時的のベース・キャムプに到着。深く且最近降つたばかりの雪の爲此處に止まるのを餘儀なくせらる。天候は惡かつた。

廿二日　食糧を携行してベース・キャムプへ向け發足。一九三二年の遠征時に於けるベース・キャムプの場所に天幕を張るべく雪を掘りはじめた。ベース・キャムプ地に於ける最初の狀態と云ふものは唯深雪（十二呎）に於ける穴にすぎない事からして、非常に不愉快で、それはテントが張り得る樣に日々擴張せ

られなければならなかつた。

廿六日　第一隊（ヴイーランド、ベヒトールド Bechtold ミュールリッター Müllritter）は北壁直下の大堆石の上部に在る天幕へ行つた。その主なる目的はかの一二、〇〇〇呎の北壁の絶頂から深底へ、晝となく夜となく落下して居る大なる氷崩（アイス・アヴアランシエ）をカメラに收める爲であつた。

廿七日　ヴイーランドは第一キヤムプの地點及び其の附近に於ける雪の狀態の貴重なる報告をもたらした。そして征頂の爲の出發は一刻も早くなされなければならぬと主張した。

廿八日　シユナイダー、アツシエンブレンナー（Aschenbrenner）及びダージリングの人夫達が出發した。

廿九日　ヴエルツエンバツハ（Welzenbach）、ドレクセル（Drexel）の兩名、第四キヤムプ地へ出發。天氣は未だ定まらず。大概は惡かつた。雪もまだ屢々降る樣子であつた。

六月二日　前進した隊は第一キヤムプを去つて第二キヤムプへと突進したが、彼等は前進をはゞむ深雪の爲に、ある一時的の天幕で一夜を明かさればならなかつた。

四日　第二キヤムプは一九三二年の時と大體同じ場所に建設された。が後日天幕の下方及び周圍に大罅隙が開き又氷柱が落下して危險を釀す爲に、此のキヤムプは全然移動されればならなかつた。巨大なるラキオツト氷河の波頂上の荒涼たる氷原の眞只中に位置せるこの第二キヤムプは常に滯在するに不愉快なそして危險多きものであつた。一時は一寸留まつたり、又は單に休息や食糧保給用の如き天幕としてしまほうと考へたが、第一キヤムプから直ぐ第三キヤムプへ登る事は荷を負える人夫共には不可能な事が解り、爲に第二キヤップは續けて使用せられたのである。

六日　幾度も大きな困難が重れられて第三キヤムプが建設せられた。前進せる隊は五日の晩は一時的の天幕に一晩明かさればならなかつた。氷原上の良き路を發見する事が非常に困難であつたからである。卽ち此處より、氷河の移動せる爲其の狀態が既に變化して了つて居たので、一九三二年の足跡は最早や辿る事が出來なかつた。此の時分一般に天候は極めて不順で、大雪が降つた。

七日　第三キヤムプに居つたドレクセルは强烈な風邪にやられて治療する爲にひきかへす樣、やつとの事で納得せしめられた。彼は極度に消耗して第二キヤムプに到つた。折よくこのキヤムプに居合せたミユルリツターは急ぎ醫者を得る爲に出發。

八日　バアナアド博士（Dr. Bernard）は此の日の午後第二キヤムプに到着したが、ドレクセルは此の夜九時に肺炎によつて起る肺臟充血で遠眠した。

九日　此の日早朝、第一キヤムプより第二キヤムプへの驚異的な夜間登攀を行つてヴイーランドは酸素を持參して來た。が彼の友を救ふにはそれは餘りにもおそすぎた。今や登攀者も人夫も總て一先づ山をさしをいた。

十一日　ドレクセルの遺骸はベース・キヤムプ近く、ナンガ・パ

ルバッドの大北壁に直面せる驚異的なる場所に埋葬せられた。

十四日　ヴイーランド及びサングスターはブルダアル峰（Buldar peak）（一八、〇〇〇呎）に登り、ベイス・キャムプよりは見えないナンガ・パルバッドの絶巓の有用なる寫眞を得た。

十六日　或る故障がツアンパ（Tsampa）（註・大麥の一種、チベットの主食物）卽ち高度のキャムプに於けるダージリングの人夫等の本格的糧食の到着に際し起つて居たので、長い待期が引續いた。この遲延は大きな痛手であつた。と云ふのは、この待期々間中、天候は絶好であつて、最も貴重なる時が徒らに過ぎて行つた。有用なる作業の如何かはなされた。そして吾々が最後の攻撃の爲に、先に進めるベース・キャムプとして用ひんと欲して居た第四キャムプへ食糧が日毎運ばれ貯蓄された。

廿二日　遂にツアンパが到着したので、メルクル、ヴエルツエンバッハ、ベヒトールド、ミユルリツター、シユナイダー、アッシエンブレンナーの六名よりなる第一隊は第四キャムプにむけ出發し、廿五日に着いた。

廿五日　第二隊（ヴイーランド、バアナアド、サングスター）はベース・キャムプを去り廿八日に第四キャムプに到着。此の日ナルクル、フリエール、ベヒトールド、ミユルリツター、シユナイダーの五名は西チヨングラ峰（West Chongra peak）（約二一、五〇〇呎）に登頂。

卅日　ヴイーランド、サンゲスターの兩名も西チヨングラ峰に登攀。天候は變り相な傾向を示し、ベース・キャムプに於ける余等の滯在期間の時の樣な良い天氣ではなかつた。第四キャムプに於て絶頂への攻擊のプランに關し長い相談が行はれた。ヴイーランド及サングスターは次の如き骨子となるプランを提出した。卽ち四人の登攀者よりなる二つの隊を編成し、その各々は二日間の間を置いて第四キャムから出發すると云ふのである。けれ共此のプランは種々なる理由――人夫の中に病人が大部出來た事や最も重要なる燃料の缺乏せる事――の爲に、大部變更せられなければならなかつた。結局七人の登攀者の組織する一隊が役立つ人夫を全部引き連れて、征頂の擧に第四キャムプから共に出發すると云ふ事が可決せられた。

七月一日　第一隊（メルクル、ヴエルツエンバッハ、シユナイダー、アッシエンブレンナー）は第五キャムプへ出發。

二日　第二隊（ヴイーランド、ベヒトールド、ミユルリツター）も亦第五キャムプへ出發。彼等は上方に於て第一隊と合併し且共にラキオット峰を越へ得る事を望んだ。第五キャムプ地はラキオット峰への最後の急峻な斜面下の尾根上に位置してゐる。此の峰は越へるに想像よりもはるかに多くの困難を必要とし、二日間のつらい仕事を要求した。足場は非常に急峻な斜面に切られればならず、而も固定綱は四百呎以上もの間に取附けられた。

四日　登山隊（六名の登攀者と十八名の人夫よりなる）はラキオット峰を越へた向ふ側で頂上下三百呎の地點、卽ち實際に一九三二年遠征時に於ける第七キャムプ（最高キャムプ）――と

ほゞ同地點に第六キャムプを設立。第四キャムプに於て既に天候は崩れ出して居た。——晝間は降雪があり、夜には猛烈な風が吹きまくつた。が二三、〇〇〇呎以上の第六キャムプに於ては天候はそれ程惡くはなかつた。——唯「强烈だがそれ程不愉快ではない風が吹く」と報ぜられてゐる。

五日　ミュルリッターは病氣になつた一人夫を連れて第四キャンプに下つたが、後日又必要な食糧を持つて第五、第六キャムプにひきかへす可きであつた。登攀隊員は「ムーアス・ヘッド」(‘Moor’s Head’) と命名した氣まぐれな岩塔をよぎり、尾根に沿ふて前進し、此の尾根の最低鞍部に到着した。此處より更に登攀を續けシルバー・サドル (Silver Saddle) への急峻なる小隆起の下方に第七キャムプを張つた。之は一日の非常に困難なる登攀ではなかつたけれ共深雪によつて奮鬪せねばならないものであつた。隊員がキャムプを張つて居る時あだかも嚴酷な暴風雪が起り、彼等の作業を極度に苦境に落入らしめた。

六日　數名の病める人夫を倶ひベヒトールドは隊を離れ第四キャムプにもどつた。彼は萬一の場合に第六、第七キャムプに不自由なき樣準備するにミュルリッターを援助す可きであつた。それ故登攀隊は今や五名の登攀者と十一名の人夫によつて組織される事となつた。

第八キャムプへの登攀は此の日早朝始められた。シュナイダーとアッシエンブレンナーが先頭に立ちシルバー・サドルへ向ひ急峻極まりなき斜面に足場をカットした。此等の二人の登攀者は最も美事なるフォームをなして、速やかにサドルに着き、も早や彼等の前には最後の臺地(プラトー)がひかえてゐるのみ。——「それは比較的長いが主峰に迄登るにそれ程困難なる距離ではない。」シュナイダーは、確かに次の如く述べて居る。彼とアッシエンブレンナーとはその日に頂上に達する事が出來、然ももどつてきてキャムプを張る事さへ出來たかも知れぬと。が併乍彼等の同僚に公平を約して既に協定されたプログラムを採る事に決心した。そこで彼等はシルバー・サドルから程遠からぬ臺地に第八キャムプのサイトを選んだ。實に彼等は正しく臺地を横切つて美衞峰 (‘Fore Peak’) 迄進んだ。此處卽ち二六、〇〇〇呎の地點こそナンガ・パルバットの登り得た最高地點であつたのである。既にシルバー・サドル迄極度に苦しい登行を成して居た人夫達は、これ以上臺地を横切つて進む事は不可能であつた。この理由の爲に第八キャムプは二五、〇〇〇呎の地點、シルバー・サドル近くに張られたのである。

七日　戰慄す可き暴風が、その夜及び翌朝隊員が丁度絶頂へ出發せんとする時に捲き起つた。暴風は猛意を益々たくましくし、餘り强烈なので天幕の外では呼吸することが出來ない程であつた。粉雪は横樣にふきつけられて舞ひ、厚く積つた。諸々の狀態は危險になりはじめた。此の苦しみに搗てゝ加へてテントの支柱は折られ、シュナイダーとアッシエンブレンナーの居た方のテントは積雪の中へ埋沒し始めた。けれ共全隊員はかゝる强烈なそして寧猛な暴風は一日以上續く事はあり得ないだらうと

信じてその日はガン張る事に決心した。

彼等は其の日一物も喉を通さず、唯苦心慘憺して作られた紅茶を一杯のんだきりであつた。その夜の狀態はより惡化し樣も決して良くはならなかつた。他方のテントの支柱も破壞され暴風の威力は無上に恐ろしいものがあつた。

八日　次の日は前にも增して惡化した狀態であつたが爲、隊員は遂に第四キャムプへ退去する事にきめざるを得ない樣になつた。そして天候が好變してから征頂の攻擊を再び繰返へさんものと考へた。全員は寒氣と高度と加ふるに滋養物の不足からその時は比較的弱つて居り、これ以上此處に止まる事は不可能であつた。シュナイダーとアッシエンブレンナーとが三名の人夫と共に先頭を行き、シルバー・サドル上及びそれより下方の踏跡を再び作る事。そして殘りの者が直ちにそれに從ふ事となつた。その時全隊員、人夫達には惡い樣なコンディションは認められず、割合に早く下り得ると云ふ望みをもち、且人夫の荷物を輕くする爲に、一テント及び少しの用具は第八キャムプ地に殘しておいた。

シルバー・サドルを横切る時に一つのスリーピング・バッグが文字通りに、突風の猛威で人夫の背負ふ荷物の中からもぎ取られ吹き飛ばされて了つた。このバッグは二登攀者、卽ちシュナイダー及びアッシエンブレンナーのもので、つまり此の爲に彼等は何んとか避難地を求め得る前に少なくも第五キャムプ（が結果は第四キャムプ迄下る事になつて了つたが）迄は下らねばならなかつた。シルバー・サドルより下方斜面の路は困難をきはめ、全く革ためて新らしい足場を刻まねばならなかつた。かの尾根道も亦非常に困難で、驚怖す可き突風中に隊員は唯々周圍六碼位しか見分る事は出來なかつた。諸々の狀態は恐ろしいまでに危險に類して居た。第七キャムプ地近くで三人の人夫は落伍し隊員は彼等を見失つて了つた。隊員はラキオット峰を越へ第五キャムプ地に到着し其處で幾分食物を得た。そしてその夕刻第四キャムプに辿り着いた。彼等は其の一日で驚異的登攀を成遂げ、身の毛もよだつ樣な狀態の下で殆ど全行程深雪の中へ踏跡を作られねばならなかつた。

彼等は、のこりの同僚達と人夫達も同じ夕刻に到着するだらうと思つて居た。が彼等が來ない處を見ると、おそらく第五キャムプに其の晩止まつたにちがひないと想像した。

九日　暴風は終日荒れくるひ、この三日目の夕刻に到るも未だ衰へんとはしなかつた。

十日　恐ろしく凍傷にかゝれる、精根を使ひ果したる四名の人夫が、より高所のキャムプから此の夕刻到着し、彼等は翌朝ベース・キャムプへ送られた。

十一日　より高所のキャムプに居る同僚を救助せんとする努力が現在第四キャプムに居る隊員によつて繰返へし繰返し行はれたが、結局それは不可能である事が判つた。――と云ふのはつまり、既に暴風の爲に、諸々の狀態が極度に惡化して了つてゐたが爲である。積雪はも早や肩の深さにまでなつてをり、曾つて

三時間で登れた處が、今では大いなる苦勞をなめて六時間半も要さなければ登れない樣になつてゐた。且亦全登攀隊員及人夫は頓に衰弱の度を進めた。彼等はかゝる登行を餘り、長くやりすぎたのであり、過勞が餘りにも大きすぎたのであつた。

十四日　遂に一人の人夫が丁度第六キャムプの後方より下山して隊員の殘りの者達を襲つた運命についての眞相を聞く事が出來た。

その物語とは大體次の樣な事である。三人の登攀者、卽ちメルクル、ヴエルツエンバツハ、ヴイーランドの人達及び人夫等は七月八日、シユナイダー及びアツシエンブレンナーの二人が下山についた直後第八キャムプを後にした。其の日は彼等はわずかに第七キャムプの少し上方の地點迄しか下れず、天幕なき其處でおそらく雪穴を掘つてその中でゝも一晩をおくつたものと思はれる。第七キャムプ近く、ヴイーランドは踏跡に腰を下し眠りに落ちて了つた。それは再び醒める事なき眠りであつた。第七キャムプ地にはまだ一天幕がごうやら立つてゐて、隊員の數名を覆ふ事が出來た。人夫のキタアル（Kitar）、キクリ（Kikuli）、ニマ・タシイ（Nima Tashi）、ダ・トウデユ（Da Thoudu）は更に少し下つて第六キャムプ近くの一氷穴でその夜をおくつた。七月十日に之等の人々は、既にシユナイダーやアツシエンブレンナーと共に先に出發し、一夜を第七キャムプにおくりその翌晩は第六キャムプ近くの雪穴にすごした處のかの三人の人夫に追ひ付いた。其處で彼等は一緒になつてラキオツト峰を越へ、七名の中四人の人夫はその日第四キャムプに着いたのであつた。此の四人とはバツシイン（pa sing）、キタアル、キクリ、ダ・トウデユであつた。殘つた三名の人夫、ニマ・ドルジエ（Nima Dorje）ピンツオ・ノルブウ（Pintzo Norbu）、ニマ・タシイ等は骨身をけづられるが如き消耗の結果踏跡の上に倒れつゝ第五キャムプ近くで死んでいつた。ナルクル、ヴエルツエンバツハ及び二名の人夫（ゲイレイ Gaylay、アングツエリング Angtsering）は二日間と云ふもの第七キャムプに留つたのだが、おそらくそれは暴風のおさまるのを豫想しての事に相異あるまい。ニマ・ノルブウ（Nima Norbu）、ダクシイ（Dakshi）の兩人夫は十一日に死去した。十二日或は十三日の夜にヴエルツエンバツハは第七キャムプに於て消耗の爲にこれ又死んで了つた。十三日にメルクル及びゲイレイ、アングツエリングの三人は下降を續け、第六キャムプ近くの鞍部の一雪穴に着いた。總ては非常に惡い狀態にあつた。既に少なくも四日間と云ふもの全く飲まず食はずの彼等は、高度及び、ひどい凍傷の結果益々消衰してゐた。十四日にアングツエリングは單身困難なるラキオツト峰を越して第四キャムプに下り得たと云ふ立派なる擧を敢行した。がそれと同時にゲイレイの豪俠も亦忘れられてはならない。彼は下方より救助が來る迄、彼の隊長と共に居つて隊長の面倒を見乍ら空しく努力を續けて居たのである。

十五日　も早や歩く事すら出來ないであらうメルクル及びゲイレイを救助せんとする企が再度第四キャンプから出された。

十七日　三度かゝる企が出されたが無駄であつた。それは不可能であつた。積雪は肩の深さよりももつと悪い狀態であつた。全部の隊員及人夫はすつかり消衰しきつた。あらゆる望みも斷ち切られねばならなかつた。メルクルとゲイレイは七月十四日ないしは十五日に死去したものと推定せられる。彼等には全く食物なく、數日もの間一物も食さず、消耗しきつて、その上ひどい凍傷にかゝつて居たのであつた。（"Himalayan Journal, vol. Ⅶ, 1935" より）

× × ×

敢て拙譯をさらけ出した所以のものは、一九三四年遠征時の悲慘なる結末を記述して置きたかつたからである。曾て著名なる英國の登山家A・F・マンメリイを要求したナンガ・パルバトは今又獨逸の新鋭なる登山家メルクル等を奪つて了つたのである。この樣な悲慘なる出來事は私の寡聞のせいにもよるが、登山史上餘り多くはないであらう。何かの御參考になれば幸ひです。

尙、原文には註がついてゐたが、それ程重要ではないので省略した。又メルクルは一九三二年にもナ峰に向つて居るのであるが、「山岳」第廿八年第三號にその概略が述べられて居る。

（一九三五・一一・一七KA生）

山岳部報告

記錄（二月——三月）

(1) 高尾山スキー行（二、五）望月、森脇、岩崎、其他

(2) 關、燕スキー行（二、八——一〇）增山氏、岩崎

(3) 高尾山スキー行（二、二三）岩崎

(4) 野呂川溯行、仙丈岳登攀（三、三——一二）小谷部（單獨）コース概略（甲府—芦安村—夜叉神峠—鮎差—野呂川溯行—大樺澤より御池小舍—再び野呂川本流—北澤小舍—仙丈岳登攀—伊那、戸臺—辰野—野澤の合宿へ）

(5) 野澤温泉スキー合宿（於酒屋、三、九——一八）參加者（柿原、小谷部、森脇、和田、鷹野、佐々木、鷲崎、新羅松浦、原、岩崎、大塚、齋藤、毛塚、日江井、關根、他部員外六名）

温泉の合宿は幾分ダレ氣味となり、此の點昨冬の乘鞍の合宿の方が効果があつた樣である。今後温泉の合宿は一考を要すべきなり。

(6) 妙高、野澤へのツーア（三、一三——一五）森脇、和田

(7) 木曾御岳（三、一六——一八）小谷部、佐々木、

佐々木、スリップし負傷せし爲早く切り上げる。

(8) 木曾御嶽（三、一八——二〇）森脇、松浦、關根

一、二日の連休を利用して先輩方の來られる事は豫め知つて居たが、先立つものが無くなり心細くなつて下山。

(9) 志賀高原スキー行（三、一九——二〇）鷹野、他一名

(10) 藏王山スキー行（三、二一——二二）原、其の他

(11) 伊豆の旅（十國峠、天城山）（三、一八——二七）森川

昨秋の遭難後はじめての旅、保養の温泉行もとう〳〵山へあこがれてしまつた。

日誌

●部員湯田坂哲君豫科三年はかれてより御病氣の處、三月廿二日永眠せられ同廿五日郷里長野縣諏訪郡北山村に於て葬儀を執行せられし由。おくれ馳せ乍ら當山岳部より御遺族の方への弔文に御靈前へ御供へすべき御香料を添へ御送りした。

追悼

湯田坂哲君略歴

●大正四年八月卅一日　太平洋より大きな波濤を嚙み碎く噴火灣頭、卽ち北海道茅部郡森町帝室林野局官舍に於て誕生。
●昭和八年四月　東京商科大學豫科入學
●同　年五月　一橋山岳部入部
●同　年十二月廿五日——同九年一月三日　五色温泉スキー合宿（青木小屋へ）
●昭和九年三月八日——廿一日　野澤温泉スキー合宿。
●昭和九年十一月廿五日　岩殿山へ。
●昭和十一年三月廿二日　東京市本郷區の高臺順天堂醫院の日當りよき二階の東南隅第九十三號室に於て永眠す。（大腸カタルより腹膜、肺（スキーにて衝突潜在）及心臓を冒し遂に倒る。）遺骸は東京にて茶毘に附し遺骨は、御岳乘鞍槍の高峰を眺むる郷里信州諏訪郡八ケ岳山麓の草藪深き北山村の小丘に埋む。

右は故哲君の父君幸作氏より私宛四月十日附の御手紙を基として作成したものであります。尙登山等に關しては右以外にも北海道駒ケ岳を始め、函館附近の山々へ登られ又スキーは中學時代よりやつて居たと傳へ聞いて居ります。

（望　月）

記錄

吉澤一郎、近藤恒雄

○那須平定記

二月十五日　上野發（后一一・四〇）——松川屋（五・一〇）——黑磯（四・〇一）——四・二〇——三〇）——大丸（六・五五——八・〇〇）——朝日の澤入る（八・五〇）——肩（一〇・一〇——四〇）——北鞍部（一一・〇〇）——朝日頂上（一一・一〇——一五）——鞍部（一一・二〇）——三本槍の下（一二・一〇——四〇）——三本槍（一・一五）——大峠（二・四〇——二・五五）——三斗小屋温泉（四・四〇）

十六日　温泉（九・三〇）——御澤の上（一〇〇〇）——延命水（一〇・一〇）——峰の茶屋（一一・二〇——一

十七日

一・五〇)——茶臼頂上(一二・一五——一二・二〇)——茶屋(一二・三〇——四五)——大丸(一・三〇——三・二五)——飯盛分岐點(三・五〇)——高雄の上(四・〇〇)——温泉神社(四・一〇)——關東バス(四・二〇——四・五〇)——黑磯(五・二五——五・五五)——上野(九・四五)

村尾金二、吉澤一郎、近藤恒雄

○木曾御岳

三月二十日 新宿發(后一〇・四五)

廿一日 雨后晴、福島發自動車(八・二〇)——田中(九・〇五——九・一五)——千本松小屋(三・四五——四・〇〇)——中ノ小屋(四・四五)

廿二日 快晴、中ノ小屋(六・一〇)——飯盛(七・一〇)——シーデポー(八・二〇——八・四五)——頂上(一〇・三〇——一一・一〇)——中ノ小屋(一・〇〇——二・三〇)——千本松(三・〇五)——六合支店(四・一〇——五・〇〇)——田中(六・三〇——七・一五)——福島驛(七・五五——八・四〇)——翌朝六・一〇新宿着

増山清太郎

○磐梯山

三月廿一日 霙、猪苗代湖畔に遊ぶ、午后押立温泉へ

廿二日 晴、頂へ往復、夜行歸京

東京から八時間足らずの所にこんな面白い山があらうとは今まで氣が附かなかつた。翁島驛で六尺の積雪。押立からは頂上の西南側の夏道の尾根を登つても、一度中ノ湯(冬期無人)に出て北側から登つてもよい。私は前者をとつた。五合目迄は實に雄大な斜面、此處でスキーを脱で急斜面を登ると、六合目邊は風當の良い陽だまりで、雪は殆ごない。八合目邊は一度融けた雪が氷つてゐた。九合目から上はウインドクラストの連續。そして頂上には例の通りクリスマスの御菓子の樣になつた神社があり、一風變つた眺望が開けてゐる。歸途には雄大な斜面がフイルムクラスト狀をなして斜陽に輝いてゐた。

往復六時間程度樂な山で頑張れば日歸りも出來る。併し場合に依つては馬鹿に出來ない事は登高行第五年を見れば判る。冬の吹雪は猛烈さも想像出來た。そして變な所に雪崩が出來てゐた。

スキーにも極く良い。北側から登れば頂上直下までスキーに適する。併しスキーだけを樂しむのなら猫覽ケ岳の方が更に良い。この初春の連休に登山客三人とはまるで嘘の樣だ。宿の息子がスキーが上手で山案内も出來る。

中川孫一、松木謙三

○澁峠越

三月廿一日——廿二日

廿一日は輕い吹雪の中を草津から登つて横手山ヒユッテ泊り。三角點直下のゲレンデの粉雪はとてもすばらしく春とは思へなかつた。廿二日は絶好の快晴、志賀高原の春の雪を滿喫しつゝスキーした。波坂の下りも軟雪で快適だつた。

○神樂峰春スキー　中川孫一、松木謙三、望月、鷹野。

四月五日

絶好の新雪と好晴に惠まれ上の芝から慈惠ヒュッテ迄の大滑降は譬へ樣のない爽快さであつた。

針葉樹會例會　二月七日（金）如水會館

出席者（會員）吉澤、近藤、高瀬、園山、吉澤（松）、太田清水、鈴木、增山、打橋、（部員）林、柿原、望月、森川、岩崎、

針葉樹會例會　三月七日（土）矢野記念館

出席者（會員）中川、松木、村尾、吉澤、矢作夫妻、近藤、磯野、久保田、園山、吉澤（松）、增山、鈴木、丸茂（部員）林、望月、鷹野、齋藤、柿原、小柳、岩崎

新入會員歡迎會　三月廿六日（木）元園軒

出席者（會員）中川、松木、村尾、吉澤、近藤、金田、吉澤（松）、增山、鈴木、（新會員）齋藤正治、小柳二郎、鷹野雄一、（部員）林、望月、榎本、原

針葉樹會例會　四月二十日　如水館中集會室

中川、松木、村尾、吉澤、矢作、近藤、磯野、高瀬、增山、鈴木、清水、吉澤（松）（學生）小谷部、望月、林、柿原、榎本、新羅、岩崎

溪流に沿ふて奥多摩へ（四月二十九日）

新宿驛（前七・五五）—御岳驛—神路橋—瀧本御師青木氏方休憩—瀧本（ケーブルカー）—御岳神社—（ケーブルカー）瀧本—（バス）御岳驛—新宿驛（後五・〇〇）解散

天長の佳節を期して新綠の奥多摩に展開した、劃紀的な家族大會は、偶々上京された五十嵐氏を迎へて彌が上にも高潮と、春には寒い時雨日和に拘らず、より暖いこゝろのなごみに、嬉々として跳れ廻る二世、三世の心情そのまゝ、心ゆくまでこの歡を盡すことが出來た——

あの快擧、あの盛觀これは軈て艷麗美事の能文家達の描寫を待つて次號を壓卷たらしめる事を確心致します故、茲には不取敢賑々しく御參會下された皆樣の御芳名をのみ御披露致して置きます。

因に、五十嵐氏には、翌三十日、未だ生々しい感興をお土産に吉澤、村尾兩氏の見送り裡に再び岡山に向はれた。（ぶつ放送）

針葉樹會春季家旅大會出席者御芳名（順序不同）

中川孫一樣　同靜子樣　同浩一樣　同怜子樣　同數馬樣　同蔦子樣　同徹泰介樣　同松謙三樣　同溪子樣　同松一郎樣　同岑一子樣　吉澤英子樣

矢作梓樣　同謙一樣　同太郎樣　同清子樣　同有恒樣　坂本米子樣　村尾金二樣　同よし子樣　近藤恒雄樣　同隆雄樣　增山清太郎樣　小谷部全助樣（學生）　小林重吉樣　吉澤松次郎樣

會員消息

齋藤正治君　四月八日午后九時五十五分にて西下。

勤務先　三菱鑛業大阪製練所